

「認知症世界の歩き方」：笥 祐介（かけい ゆうすけ） 「レジで支払が終わるまで数々の高い壁がそびえたってる」【カイケイの壁】

－認知症のある人の頭の中をのぞいてみたら？－

《この断崖絶壁のアドベンチャーに挑む道のりには、さまざまな難所が待ち受けています。時には記憶の溝にはまり、どこに手を伸ばせばいいのか次の動きが分からなくなる。時には巨大な生き物の鳴き声に驚き、注意を奪われる。目の前の空間が歪み、足を滑らせ踏み外す。タイムリミットは数十秒。》

私たちの生活には、色々な「手続き」があふれています。お会計をする、という単純に見える手続きにも、実は複数の手続きが隠れているのです。

◆ 次々に襲い来る「手続き」という名の壁

- ① 買い物のレジで、「お会計は355円です」と言われて、財布を取り出そうとした目線を落とした瞬間に、いくらだったか忘れてしまい、何度も聞きなおしてしまいます。533円と勘違いすることもしばしば。
- ② 金額を忘れるだけでなく、計算することも難しくなっています。100円が3枚と十円が5枚・・・というふうにパット頭に浮かばない。またシルバーと白っぽいシルバーとい微妙な色の違いがわからず、100円玉と1円が区別できない等々。

◆ 会計にすごく時間がかかる理由

- ① 会計という行為の手順：「金額を聞く」⇒「金額を覚える」⇒「小銭と紙幣の組み合わせを計算する」⇒「必要なお金を探す」⇒「お金をつかむ」⇒「店員さんにお金を渡す」の6つの手順
- ② 手順の壁：【記憶の壁】店員さんから聞いた金額を財布からお金を出すまで覚えておくこと、【計算の壁】小銭と紙幣の最適な組み合わせを計算する、【錯覚の壁】色と形を「見分けて必要なお金を見つける、【注意の落とし穴】店員さんの声掛けやBGM、後ろで待つ人を気にするなど複数の情報から意識の取舍選択を迫られる、【空間の壁】財布の中の効果を掴みトレイにお金を落とす。
⇒ちょっとつまずいただけで、途端にこの後、どうすればよいか分からなくなってしまうことがあるようです。
⇒こうした事態を避ける方法は、ゆっくりと店員さんの話を聞き、金額を何度も確認し、財布からじっくりお金を出す。つまり時間をたっぷりかけて会計をすればよいのです。（イギリスの「スローレジ」の例）

◆ この障害が原因と考えられる生活の困りごと

- ① 簡単な数の計算ができない
 - ・適切な分量を量れない
 - ・支払う金額の計算ができない
 - ・注文する弁当の数を間違える
- ② 小さな環境変化に柔軟に対応できない
 - ・レジで複数のことを言われると混乱する
 - ・出目印がなくなると・変わると途端に道に迷ってしまう
 - ・家電や文具など新しいものの使い方がわからない
- ③ 慣れ親しんだ手続・習慣を想起・実行できない
 - ・味噌汁を作る工程が分からなくなる
 - ・包丁の使い方・食材の切り方がわからない
 - ・冠婚葬祭の場で適切な行動がとれない
 - ・仕事・公的手続きの手順がわからなくなった
- ④ 複数のモノ・コトから正解や最適解を選択・判断できない
 - ・気候や場に応じた服や持ち物を選択・判断できない
 - ・靴を間違える
 - ・整理整頓ができない
 - ・スーパーの陳列棚で買うものを取り間違える

◆ 読み終えたあなたに（筆者より）

*認知症のある方が抱える、生活の困りごと。その中には、ご本人でさえ「なぜ？どうして？」と説明が難しいことがたくさんあります。

*しかし、その困りごとの背景には必ず、原因となる心身機能障害や周囲の環境があります。原因が解れば、解決策やじょうずに向き合う方法を見つけることができるはずです。

*また登場した困りごとの中には、あなた自身、身に覚えがあることも多かったのではないのでしょうか？

*こうしたできごとは決して特別な「理解しがたいこと」ではなく、認知症かどうかにかかわらず、加齢や心身の疲れ・周辺環境によって誰もが日常的に体験することであったりもすることです。

《あなたの認知症に対するイメージは、どのように変化したでしょうか？》

本紙のイラスト、ストーリー、具体的な日常の困りごとなど分かりやすく、認知症の方が行動の原因がよくわかり対応の仕方など大変参考になる内容でした。